法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-04

近世以降の佐原における地域構造の形成

志村, 遥奈 / SHIMURA, Haruna

(出版者 / Publisher)
法政大学大学院デザイン工学研究科
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政大学大学院紀要. デザイン工学研究科編 / Bulletin of graduate studies. Art and Technology
(巻 / Volume)
12
(開始ページ / Start Page)
1
(終了ページ / End Page)
8
(発行年 / Year)
2023-03-24
(URL)
https://doi.org/10.15002/00030256

近世以降の佐原における地域構造の形成

DEVELOPMENT OF REGIONAL STRUCTURE IN SAWARA SINCE EDO PERIOD

志村 遥奈
Haruna SHIMURA
主査 福井 恒明 副査 今井 龍一

法政大学大学院デザイン工学研究科都市環境デザイン工学専攻修士課程

The purpose of this study is to clarify the regional structure of Sawara from the viewpoint of its formation process in order to consider the value improvement and sustainability of the Sawara region in the future. The study was based on a survey of local historical documents and other literature to understand the formation process of the region. As a result, it was clarified that the function of the residents' self-governing body contributed greatly to the regional structure of Sawara.

Key Words：*regional structure，formation process，residential autonomy*

1. 序論

(1) 研究背景

千葉県香取市佐原地域（以下，佐原地域）は千葉県北東部に位置し，利根川を中心として水田地帯や霞ヶ浦など豊かな水辺が広がる地域である[1]．特に，小野川周辺は近世以降舟運を中心に河港商業都市として発展した地域であり，現在も歴史的な町並みが残る地区である．1996（平成 8）年には，重要伝統的建造物群保存地区（以下，重伝建地区）に選定され，香取市の観光拠点として空き家や現在未使用の蔵を活用したリノベーションや舟運の活用，佐原の大祭など，近世の佐原の姿を観光資源としたまちづくりが行われている．しかし，こうしたまちづくりにおいては，現代にも残る歴史的資源の活用にとどまっており，これらを維持し，持続可能にしていくためには，地域構造に基づいてその全体像を把握する必要があると考えられる．

地域構造について北村（1990）[2]は，地域の環境に支えられ，人口や社会，経済や交通，水利や産業など，さまざまな要素や活動の相互関係性とそれらの空間配置によって形成されるものと述べている．また，地域構造はそれぞれの地域の形成過程の上に成立するものであると考えられ，地域構造を理解するには地域の形成過程を把握する必要がある．

(2) 研究目的

本研究では，地域の持続可能性における課題把握に向けて，佐原地域の地域構造をその形成過程を踏まえて明らかにすることを目的とする．

(3) 研究方法

本研究では，千葉県香取市佐原地域の形成過程から地域を形成するさまざまな要素や活動の相互関係性の把握を行う．そのため，郷土史資料，佐原地域を対象として行われた調査の報告書や記録文書，既往研究を用いた文献調査を行う．調査年代を町場として大きく発展した近世以降とし，郷土史資料を用いた文献調査から佐原地域の形成過程と地域を構成する要素の把握を行う．次に，佐原の地域構造を構成する要素に関する研究や報告を分野ごとに整理しその特徴を読み取る．これらを踏まえて佐原の地域構造を構成する要素同士の相互関係性の把握から，佐原の地域構造の特徴を読み取る．調査に使用する文献資料は**表 1** のとおりである．佐原地域の歴史を通時的に整理した資料であること，郷土史資料においては情報が不足したものを補填する内容であることを考慮した．

(4) 既往研究と本研究の位置付け

地域構造を取り扱う研究においては，人口データや交通データなどの定量的な観点から地域構造を把握した研究が中心であり，近年では地域形成史に基づき特定の観点から地域構造を捉える研究が見られるようになっている．

定量的観点から地域構造を把握したものには，中核都市や都市周辺地域を対象に，人口密度やその分布，土地利用やその面積の観点から分析を行い，それぞれの要素の分布と相関から地域構造の現状を明らかにした太田ら（1966）[3]や入沢ら（1967）[4]の研究がある．他にも，森田ら（2014）[5]や齊藤（2019）[6]は地域計

表 1 使用する文献資料(一部抜粋)

	資料タイトル	編著者	発行年
郷土史	佐原市史	佐原市役所	1966
	佐原町誌	佐原町	1973
	千葉県の歴史 通史編：近世1	千葉県史料研究財団	2007
	千葉県の歴史 通史編：近世2	千葉県史料研究財団	2008
	千葉県の歴史 通史編：近現代1	千葉県史料研究財団	2002
	佐原の歴史創刊号	佐原市教育委員会	2001
	佐原の歴史第3号	佐原市教育委員会	2003
	佐原の歴史第4号	佐原市教育委員会	2004
	佐原の歴史第5号	佐原市教育委員会	2005
調査報告書	佐原の町並―佐原市伝統的建造物群保存地区調査報告―	佐原市教育委員会	1975
	町並に関する調査報告書第一集 佐原市本宿の歴史と祭礼	千葉県立房総のむら	1992
	部冊帳第五巻より 佐原村用水及び用水樋修覆の事	香取五郎	1994
	佐原山車祭調査報告書	千葉県佐原市教育委員会	2001
関連書籍	利根川治水の変遷と水害	大熊孝	1981
	利根の東遷と水郷の人々	鈴木久仁直	1985
	増補改訂佐原の山車まつり	清宮良造	1995
	佐原の大祭	特定非営利活動法人 佐原アカデミア	2017

画における地域構造に着目して，人口や産業体系，交通体系などのデータに基づき，震災前後の地域構造の比較による地域構造の評価から地域課題を明らかにしている．

地域形成史に基づき特定の観点から地域構造を明らかにした研究では，樋渡（2017）[7]によるヴェネツィアのリドにかつて存在していた宗教的空間や墓地，居住区などの空間の形成過程の把握と，地図資料や不動産台帳を用いた土地利用把握から地域構造を明らかにしたものがある．また，齋藤（2021）[8]は都市と周辺地域を一体として捉えるテリトーリオ概念を参照し，越後平野西部の自然条件と人々の活動の相互関係性やそれらの領域を把握し地図表現を行うことで地域構造を把握している．

以上のように，地域構造に関連する研究の多くは数値指標をもつ観点から地域構造を把握し現状の地域構造の特徴や課題を論じる一方で，その地域の文化や歴史という観点から地域構造を捉えようとする知見はまだ少ない．したがって，本研究では，地域の形成過程に基づき地域の文化や歴史という観点から地域構造を捉えるという点に独自性を有している．

2. 佐原の地域構造とその形成過程

(1) 佐原地域の形成過程の把握

佐原地域の形成過程を把握するため，**表 1** に示した文献資料のうち郷土史資料を中心に佐原地域を構成する重要な要素を確認すると，「統治状況」，「住民自治」，「社会基盤整備」，「治水」，「産業」，「祭礼・信仰」の 5 項目に分類することができた．さらに，「政治」の項目に関しては統治状況と住民自治とに分類した．これをもとに，年表形式に整理した（**表 2**）．これに基づき佐原地域のその形成過程について述べる．

a) 政治

① 統治状況

佐原地域の統治状況は江戸時代から明治時代にかけて大きく変遷してきた．1590（天正 18）年，徳川家康が関東へ入府すると下総地域一帯は幕府の領地となり，徳川家の家臣であった鳥居元忠が領主となった．1608（慶長 13）年には，佐原地域の中心部は旗本知行所となり複数の旗本によって 1 つの領地を支配する相給制をとることとなったため，4 人の旗本による支配が始まる．1633（寛永 10）年以降，村の一部が幕府領，1698（元禄 11）年になると旗本知行所に戻り，佐原中心部は三給となった[9]．その後，1739（元文 4）年になると，利根川流作場の開発に伴い旗本知行所は幕府へ上知となり，1740（元文 5）年より幕府領となった[10]．1777（安永 6）年，ふたたび旗本領となり津田日向守信之による支配となるが，1861（文久元）年，水戸藩士が佐原村で巨額の金品の強奪，殺傷などを繰り返し起こした天狗騒動や佐原騒擾が発生し[11]，旗本津田氏は騒動を抑えることができなかったため，佐原地域は一時的に佐倉藩領となった[12]．明治時代に入り，1871（明治 4）年に廃藩置県が実施されると 1875（明治 8）年，千葉県に編入された[13]．その後，1888（明治 21）年に市町村制が公布され，「佐原村」は「佐原町」となり，1951（昭和 26）年，佐原町・香取町など四か町村を合併して「佐原市」が誕生し[14]，2006（平成 18）年，現在の香取市が誕生した[15]．

b) 住民自治

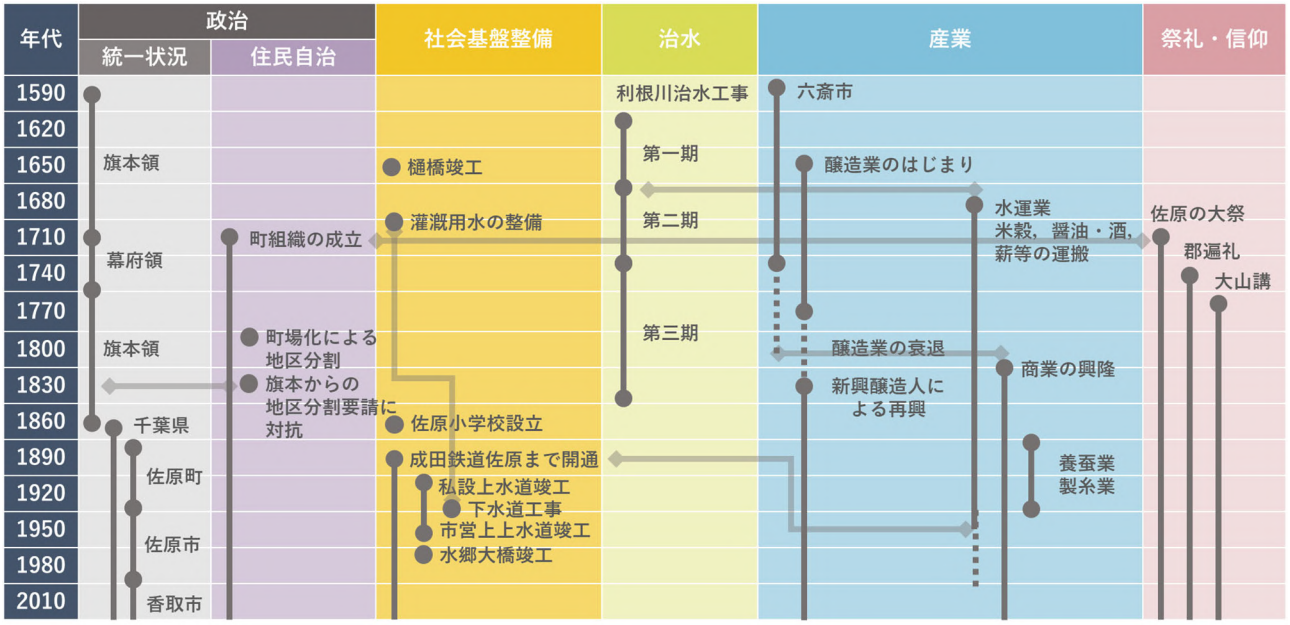
佐原地域の住民自治とされる町組織（「町内」）が成立したのは 1710 年代ごろとされており，1716（享保元）年に江戸幕府第 8 代将軍徳川吉宗の就任に際して幕府巡見使が佐原に来た際，19 町に人足の割り当てがされていることからある程度の自治が存在し町としてのまとまりを既に持っていたとされている[16]．その後も，1817（文化 14）年には住民が町場化して規模が大きくなった町の分割を願い出て実施されており，住民自治活動が確認できる[17]．さらに，1842（天保 13）年には，旗本津田氏の要人が町場の状況変化への対応のため大きな町内の分割を命じたが，住民はこれに従わず実態はこの通りにならなかった[18]．このように，住民の積極的な自治が行われており，その様子は現在の歴史的町並みの保存活動での住民の積極的な関わりにも見られる．

c) 社会基盤整備

佐原地域における社会基盤整備では，用水，道路，橋梁，鉄道，上下水道，学校の整備が挙げられる．佐原村の用水路は，灌漑用水として伊能家によって元禄時代ごろに整備されたが，昭和には各家庭の下水が流れ込むようになったため，1959（昭和 34）年から下水道工事が行われた[19]．また，下水の流入による悪臭を抑えるために用水路は暗渠となり現在はその姿は見られない．

佐原地域の橋梁として初めて竣功が確認できるのは樋橋である．江戸時代から市街の中心に架かっていた忠敬橋は，1882（明治 15）年に江戸時代以降木橋であったものを，伊能家や清宮家らの発起によって石造双眼橋として竣工され，1957（昭和 32）年には，交通量の増加に伴い拡幅が行われた[20]．さらに，1936（昭和 11）年には，水郷大橋が架かり，1964（昭和 39）年には潮来大橋が架かったことで茨城県との往来の利便性が高まった[21]．

表 2 佐原地域の形成過程



佐原に鉄道が開通するのは1898（明治31）年で，民営の成田鉄道（現在のJR成田線）が佐原まで到達すると，1931（昭和6）年には笹川，1933（昭和8）年には松岸まで延長され[22]，多くの人やものの往来が見られるようになった．

上水道の整備は1926（大正15）年から行われ，井戸水の水質が悪い地域での安全な飲料水確保のために私設上水道が整備された[23]．同様に1927（昭和2）年にも整備が行われ，船戸地区の稲荷神社に給水タンクが設けられた．1950年代には住民からの世論があがり市営上水道が竣工した[24]．

1874（明治6）年には佐原小学校が設立され，生徒数の急激な増加に伴い現在の場所に1876（明治8）年校舎が設けられた[25]．

d） 治水整備

佐原における治水整備として利根川治水についてみる．佐原において水運業が大きく発展した要因の一つである利根川瀬替は，利根川と渡良瀬川を瀬替し鬼怒川支流に合流させ江戸湾にあった河口を香取の海東端につけるものである[26]．1594（文禄3）年から1667（寛文7）年の第一期，1669（寛文9）年から1736～40（元文元～5）年の元文年間までの第二期，元文年間以降の第三期の3期に分けて工事が行われた[27]．

e） 産業

佐原の産業のうち特に活動のみられた，市，酒造・醸造業．商業，養蚕・製糸業．水運業について取り上げる．

佐原の市の起源は，佐原・伊能康之助文書に記録が残っており，徳川家康関東入府以前にまでさかのぼる．1580（天正8）年，当時の領主である国分氏が，領内の繁栄のための施策として新宿での市の設立を許可したため，新宿六斎市は成立し[28]佐原地域はこれをきっかけに商業地域として発展していく．発展過程では，市場独占状態となった下宿と上宿・中宿との新宿内部での対立，市場設立に出遅れた本宿地域と新宿地域との対立の争論も起こったという[29]．この六斎市の終わりについて詳細は不明であるが，少なくとも1740年頃までは争論が続いていたことから市が存続していたと考えられる．

近世の佐原の工業を代表する酒造及び醸造業をみる．佐原においては，近世初期に酒造が始まり，その後その規模を拡大し醤油や味醂なども含めた醸造業が盛んとなっていく[30]．佐原における酒造は，寛文年間（1661～72年）に伊能三郎右衛門が酒屋をはじめたことに始まる[31]．1729（享保14）年には伊能家の醤油醸造に関する明確な記録が初めて見られ，醤油醸造を一企業として確立させて営業していた[32]．1771（明和8）年当時の佐原村の酒・醤油醸造人は37人，1787（天明7）には酒造人が35人となっており[33]，酒造や醤油醸造が盛んに行われていたことがわかる．その後，一時的に衰退の傾向が見られるが，近世末期ごろから台頭してきた新興酒造・醸造人によって佐原の産業として確立され，兜印醤油合資会社（1897（明治30）年創立）や菅井醤油醸造場（1867（慶応3）創立）などが全国的に知られていった[34]．

養蚕や製糸が盛んになるのは，明治から昭和初期であり，佐原で開催された品評会において高い評価を得たことがきっかけとなり伝習所が設立されたのがはじまりである[35]．その後，1925（大正14）年には繭の売買斡旋や乾燥・保管などを行う会社が設立され，10年後には市場で取引を行う製糸業者が50社となった[36]．

近世の佐原ではさまざまな商業が行われて，江戸時代中期には米穀商や薬種商，呉服商，そば屋や菓子屋などが見られた[37]．また，卸売や小売り商品として，呉服商をはじめとして茶や砂糖，畳表や小間物，売薬や本などの日用品が取り扱われていた[38]．その後，佐原ではさまざまな業種の商店が登場し，『佐原案内（1914（大正3）年）』[39]の「佐原町商工人名録」からその様子が窺える．この当時商店は佐原の町の中心部と小野川沿いに多く建ち並び，米穀肥料商や呉服商など従来からの業種だけでなく，西洋洗濯業や時計商，自転車業や牛乳商などさまざまな新産業がみられた[40]．その後，高速道路建設やそれに伴う新たな市街地拠点の設置により，商業地域としての勢いは衰えていった．

佐原の水運業は，近世前期に行われた利根川瀬替え工事での

利根川流路の変更による影響を受け佐原河岸を中心として発展した．佐原河岸は，利根川下流域地域における物流拠点および江戸への中継地の役割を担った[41]．佐原地域の舟運は，幕府から河岸問屋株の公認を受け荷物の取り扱いを独占する権利を与えられる河岸吟味の実施をきっかけに発展した[42]．佐原河岸での河岸吟味は，1690（元禄3）年の河岸吟味，1772～1774（明和9～安永3）年の明和・安永の河岸吟味が行われ[43]，公認されると年貢米輸送をはじめとして，米穀や醤油・酒，薪などが輸送された．その後，鉄道が開通した後も，水運業は衰えることなく発展したが，1950 年代ごろから自動車の普及による陸上交通の発達が影響したと考えられ，舟での運搬の利用は減少しその後衰退した．

f）　祭礼･信仰

佐原の祭礼・信仰を特徴づけるものとして，佐原の大祭についてみる．佐原の大祭のはじまりは明らかとなっていないが，1721（享保6）年の文書に祭礼に関する取り決めが行われていた記録が残っており，1721（享保6）年には佐原の大祭が行われていたと考えられる．このとき，新宿においてはほぼ各町で山車が出揃っていた[44]．その後，利根川の水害や領主の取り締まりにより大祭が開催されない年もあったが[45]，現在まで引き継がれている．佐原における民間信仰は江戸時代を通じて盛んに行われており，郡遍礼や講などが挙げられる．郡遍礼は，1754（宝暦4）年に観福寺の僧を中心に四国八十八ヵ所霊場の札所を模したものを佐原村にも設けることで，四国まで行かずに地元である佐原で済ませようとして誕生した[46]．これは大師講とも呼ばれ[47]，現在も盛んに行われている．講に関して，大山講や三峰講などの代参講が見られる．大山講は，1764（明和元）年に大山石尊大権現が流行神として伝播したことで始まった[48]．大山講は，神奈川県伊勢原市に鎮座する大山阿夫利神社へ参詣するもので，現代も行われている[49]．

以上を踏まえると，佐原地域の形成過程に関して，産業や祭礼・信仰などの近世由来の活動を中心として発展し，それらが継承されてきたという特徴が読み取れる．

(2)　佐原に関する研究･報告の分野の整理

前項において示した佐原の地域構造を形成する要素と考えられる6項目（政治，社会基盤整備，治水，産業，祭礼・信仰）に着目し，これらに関する研究や報告の分野を整理した（**図 1**）．佐原に関する研究や報告の分野を整理すると，行政，住民自治，社会基盤整備，治水，産業，祭礼・信仰の6分野に分けられた．**図 1** より，その全体はソフト的な活動に関するものが多くみられる．それぞれの分野をみると，行政には歴史的町並みの保存状況や建造物の時期分布など重伝建選定に向けた調査やまちづくりにおける住民意識や関わり方とそれらの評価など，歴史的町並みの保全活動とその評価に関するものが多く，明治末期当時の佐原の政治状況に関するものもある．行政における重伝建地区の建築物に関する知見では住民自治や社会基盤との関連があり，特に住民自治に関するものでは，住民が主体となった重伝建地区選定に向けた活動が取り上げられている．

住民自治の分野では恒常的かつソフト的な活動に関するもの

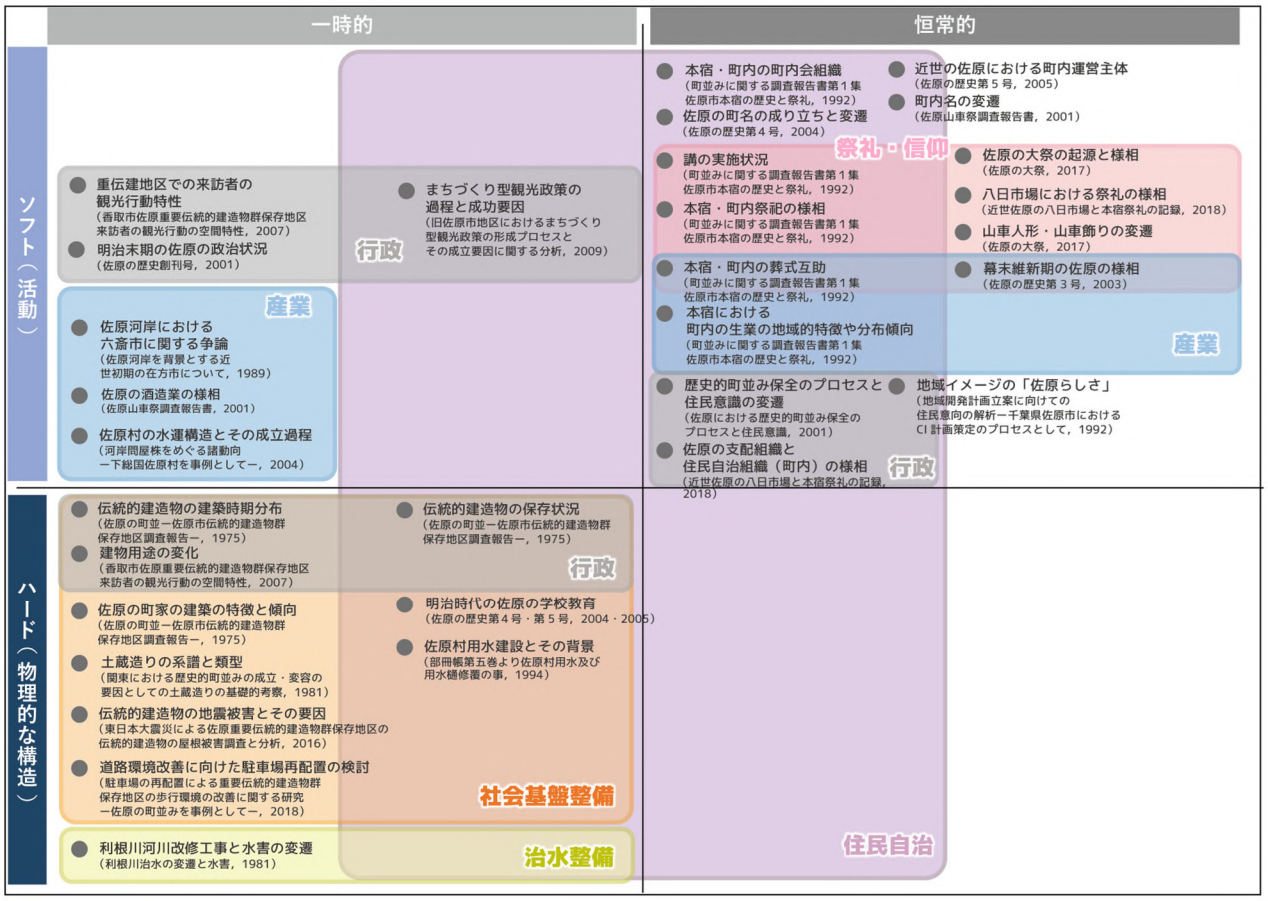


図 1 佐原に関する研究･報告の分野

が多くある．特に，「町内」と呼ばれる住民自治組織の成り立ちや機能，近世当時の活動の様子や変遷が明らかにされている．

社会基盤整備の分野では，江戸時代の用水建設や明治時代の佐原小学校設立の経緯，それらの背景に関するものが見られるのが特徴的である．また，重伝建地区における地震被害とその要因に関する分析や道路環境改善に向けた駐車場の再配置の検討など町並みの環境の見直しに向けたものが見られる．

治水に関して佐原地域を対象とした研究・報告は少なく，利根川の改修工事と水害の変遷に関するもののみ見られている．

産業の分野では，近世に発展した佐原河岸における六斎市での争論の様相や水運業の構造と成立過程などの研究がある．また，地域ごとに見られる産業の違いについて本宿地域の状況を明らかにしたものが見られている．

祭礼・信仰に関する研究・報告には，観光資源の一つである佐原の大祭の起源やこれまでの様相，大祭に使用する山車人形や飾りの変遷に関するものが見られた．また，住民自治との関連が見られる知見も多く，各町内で民間信仰として行われた講の活動記録や「町内」の神社仏閣のとりまとめが行われていた．

以上より，佐原を構成する要素に関する研究・報告の分野の全体像から，行政，社会基盤整備，産業，祭礼・信仰のそれぞれの分野において住民自治と関連性がある研究及び報告が多くみられることがわかる．したがって，佐原地域に関する研究や報告において住民自治に対する注目度が高いことから，佐原の地域構造を捉える視点として住民自治は重要であると考えられる．

3. 佐原の住民自治組織「町内」とその機能

「町内」とは町内会や自治会のように世帯ごとに所属し住民自治を行う組織である．その分布はのようになっており，小野川を挟んで右岸に本宿，左岸に新宿が位置し，現在はそれぞれ本宿が 12 町内，新宿は 19 町内に分かれている．ここで現在の「町内」の機能に関して整理した（**表 3**）．代表的かつ重要な活動として佐原の大祭の運営及び執行が挙げられ，佐原の大祭で使用する山車や山車人形の維持管理も「町内」によって行われている．その他にも，地域住民による火の用心の見回りなどの地域防災機能，町内での葬式準備や香典の管理，それらの連絡などの葬式互助機能，町内生活を維持のため個々の問題解決に向けた協定を統合する機能などがある．

4. 佐原の地域構造における「町内」の位置付け

(1) 佐原の地域構造における「町内」の機能

前章で述べた「町内」の現代の機能に加えて，住民自治と関連のある研究や報告から，社会基盤，治水整備，祭礼・信仰，産業のそれぞれと「町内」との関係性から，「町内」がさまざまな機能を果たしていたことが読み取れた．ここでは，関連性の見られた 4 つの要素のうち，社会基盤整備と「町内」との関係性から「町内」の機能を述べる．

「町内」と社会基盤整備には江戸時代，明治時代，昭和時代の 3 時代でその関連性が見られる．1794（寛政 6）年の「橋本町惣代行事願書」には，「*私共町内此度道普請助成の為，御制札場南川岸際江当時雪隠相建申度段，御願申上候処，川岸際之儀ニ付，後々故障之節も可有之旨被仰聞候得共，当分勝手合を以て合建申候儀ニ有之候間，各方御障りニ相成候節は何時にても取払可申候*[50]」とあり，便所の建設を町内住民が提案した記録が残っている．この便所は実際に建設され町内住民による提案が採用されたことから，江戸時代において「町内」が社会基盤の設置提案という機能を持っていたといえる．

次に，1878（明治 10）年の佐原小学校の校舎新築に関して見ると，『佐原小学校沿革史』には「*新築費　総計金三千六百五十四円六十七銭九厘五毛ニシテ新築寄附金ヲ超過シタル分ハ学資金ヨリ支拂ヒタリ*[51]」という記録があり新築費が寄付によってまかなわれていることがわかる．この寄付金は町内住民による寄付と考えられており，祭礼が行われる際の集金などで古くから佐原地域で用いられた「盛割」という方法で割り当てが行われ[52]，各町内の住民が共同責任で出金したという．さらに，1891（明治 24）年には，「*(前略) 右我々カ主唱シテ道路ノ修繕ヲ希望スルノ地ハ本町川口ノ道路ニシテ，即チ同地ハ御承知ノ如ク本町ノ咽喉ニシテ往来ノ頻繁ナルハ，今更我々ノ賛弁ヲ待タサル所ナリ，然ルニ其粗悪ナル些少ノ出水在ルモ水底ニ沈没シテ往来人ノ迷惑困難ナルハ名状スヘカラス，是レ独リ往来人ノ迷惑而已ナラス，随テ本町ノ体面ニモ関スル義ニシテ，殊ニ又我々ハ其地ニ住シ一層ノ困難ヲ直接ニ受ケ，且他人ノ迷惑モ親シク視実ニ忍ヒサルニ付，今回更ニ主唱シテ特志ノ寄附ヲ勧メ或ハ自身ノ應分ノ資ヲ投シ之レカ成効ヲ欲シタレトモ，微力ニシテ目的ヲ達スルニ難ク故ニ町税ニ頭書ノ金額ヲ御補助相成度奉請願候次第ナ*

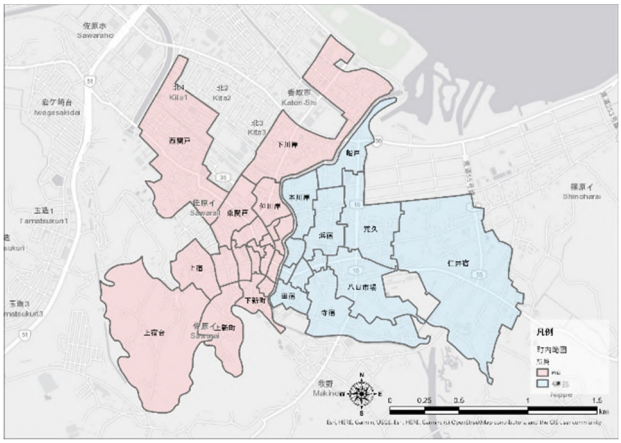


図 2 佐原地域の「町内」範囲図

表 3 佐原における「町内」の現代の機能

機能	内容
佐原の大祭執行・運営	山車ルートの設定 交代制の年番担当 山車の製作・管理
地域防災	地域住民による火の用心の見回り
葬式互助	葬式準備，香典の管理， 葬家の菩提寺及び町外への葬儀の連絡 通夜の執行
協定統合	町内の生活維持における個々の問題に対する解決のための協定の統合

レハ，事情御同察在テ御許容被成下度候也[53]」とあり，下川岸地区及び船戸地区の町内の有志が小野川通道路・約310mの修繕費の見積もりを算出し，道路地先人や下川岸地区，有志の住民の寄付でまかないきれない不足分について町の補助を申し出ている[54]．この結果，修繕費全体のうち約20%が町の補助を受けてまかなわれたが，80%は地元住民の寄付によって工事が行われることとなった[55]．また，同1891（明治24）年に，船戸地区では河岸通りの修繕を単独で計画されおよそ25%の町の補助を受けて工事が行われていたという記録も見られている[56]．以上より，明治時代には「町内」が社会基盤整備に際して費用を寄付する形で援助するという機能を持っていたことがわかる．

最後に，本宿の用水に関して川尻（2004）[57]は，「*本宿側の用水（通称堰堀）は寿命が長く，昭和三十年代までは，維持管理は江戸時代からの伝統で受益者たる浜宿・荒久・仁井宿の農家の共同責任で実際に使われていたが，現在はすべて道路になっている.*」と述べており，浜宿や荒久などの農業地帯では，江戸時代から1950年代頃まで「町内」の住民による用水の維持管理が共同責任で行われていたことがわかる．

前述のさまざまな記録に基づいて，佐原町内の社会基盤施設の建設及び維持管理に関する施設分布を**図 3** に示した．社会基盤施設の建設や維持管理に関する施設は，小野川沿いに多く分布しており，また農業地域である浜宿や荒久，仁井宿の町内やその境界に分布している様子が読み取れる．

以上より，佐原地域においては本宿・新宿ともに町内が社会基盤施設の建設提案や費用の負担，社会基盤施設の維持管理を行っており，近世以降，近代，現代と時代を通じて町内組織が佐原の社会基盤形成に寄与していたことがわかる．

(2) 佐原の地域構造への「町内」の寄与

前節での地域を構成する要素に対する「町内」の機能に関して整理を行い，**図 4** にその関係を示した．社会基盤整備に関して，橋本町における便所の設置に対して建設立案及び願い出を行い整備提案という機能が見られた．また，小野川沿い道路の修繕整備に対して道路修繕の計画を行い，整備計画という機能も持っていることがわかる．さらに，佐原小学校の新築校舎の建設に際しては整備費用を町内単位の寄付でまかなったことや，小野川沿い道路の修繕においても対象区間の調査委によって修繕費用が寄付されたことから，費用援助の機能も持ち合わせている．これに加え，農業用水路を利用する町内では，町内の農家によって共同責任で管理が行われており，維持管理という機能を担っていた．また，治水整備においては利根川の洪水や出水に対して破堤部分の修繕を行い災害支援という機能を果たしている．

産業では，産業の種類に地域差が見られており地域への影響が見られていることや，産業の地域差が葬式における供え物の差に反映されており，産業が地域の葬式互助という機能に影響を及ぼしていると言える．

祭礼・信仰においては，佐原の大祭と民間信仰である講に関して「町内」に機能が見られている．大祭においては，「町内」が担う大祭の執行・運営機能に加えて山車の製作及び維持管理機能を担っている．民間信仰では「町内」単位で活動を行っており，「町内」が講という体制の主体となり町内の住民同士の結びつ

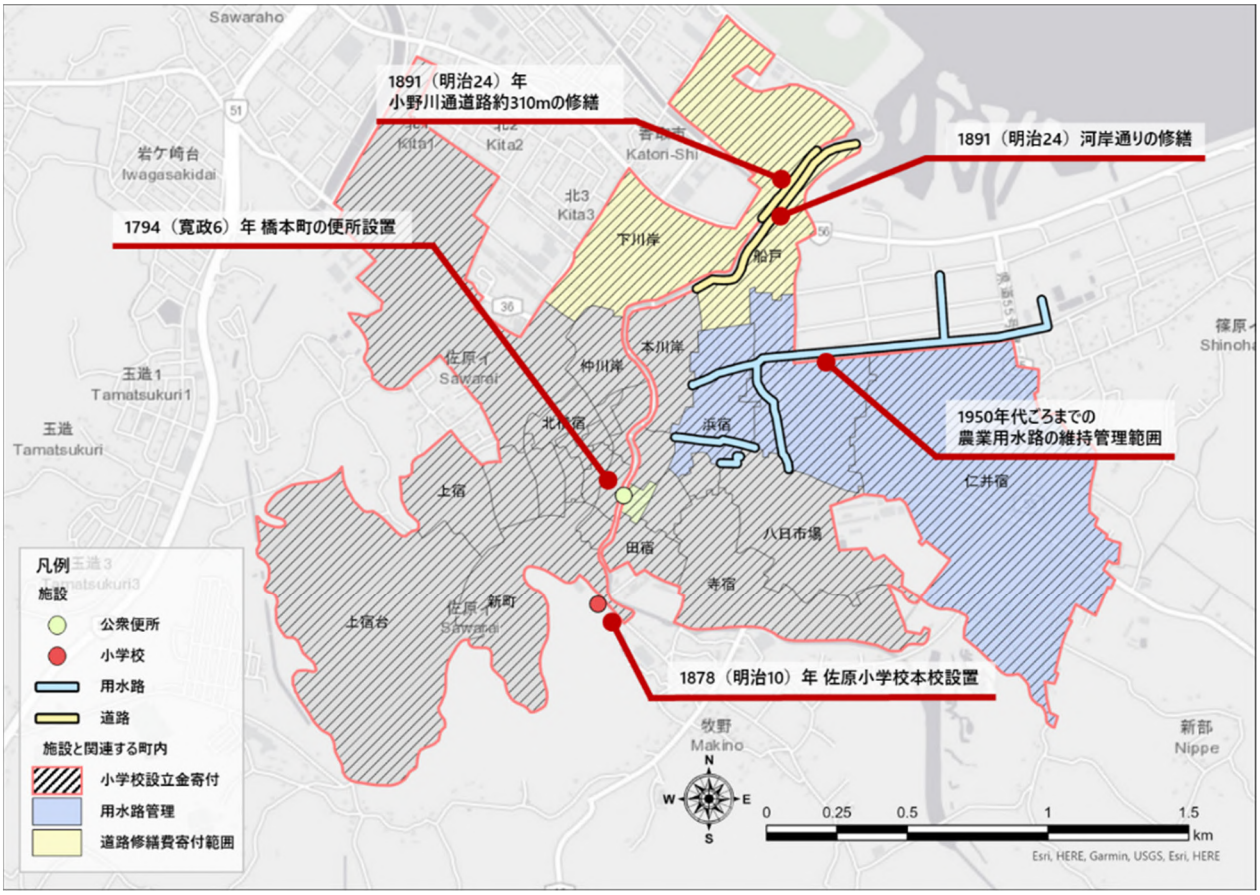


図 3 佐原町内の社会基盤施設の建設及び維持管理の分布

きを形成・保持する機能を持ち合わせていると考えられる．

次に，それぞれの機能を時系列的に整理し（表 4）その時代変化を読み取る．社会基盤整備における「町内」の機能は，用水路の維持管理が江戸時代以降昭和まで継続しているが，建設提案や費用援助，修繕経過宇などの機能は一時的に見られた．1950 年代以降，社会基盤整備における「町内」の機能は見られない点について，その役割が行政によって担われるようになったと考えられる．これによって，「町内」の機能は縮小しており，地縁的なつながりが希薄化したと考えられる．

治水整備における「町内」の機能である災害支援の機能は江戸時代に短い期間で継続していることがわかる．また，産業においては，商業が発展しさまざまな業種の商店が見られた大正時代以降にその影響が見られる．さらに，祭礼・信仰における機能では，佐原の大祭の運営及び講の運営は江戸時代中期から，山車の製作や管理の機能は江戸時代末期から見られており，これらの機能は現代にも引き継がれている．

以上より，現代における「町内」の機能に加えて，江戸時代以降「町内」が佐原地域の形成過程において社会基盤整備，祭礼・信仰や治水整備に対して機能を果たし，産業においては影響を受けながら結びつきをもち，多面的な役割を果たしてきたと考えられる．したがって，住民自治の形態として近世以降に成立した「町内」は，佐原の地域構造の核となる要素であり，佐原の地域構造の成立の一端を担ってきたと考えられる．さらに，社会基盤整備の機能は「町内」にとって代わり行政がになったと考えられるが，これに伴う地縁的なつながりの希薄化という影響を踏まえると，佐原地域における「町内」の存在は持続可能な地域にしていくために重要な要素であると考えられる．

これらを踏まえると，「町内」という観点から佐原の地域構造を捉えると，社会基盤整備，治水整備，祭礼・信仰，産業という要素や活動が「町内」と相互に結びつき形成されていると言える．

表 4 佐原における「町内」の機能の時代変化

年代	社会基盤整備	治水整備	産業	祭礼・信仰
1730	用水路の維持管理			佐原の大祭の運営・執行
1750		災害支援		講の運営
1770				
1790	橋本町便所新設の建設提案			
1810				
1830				
1850				山車の製作管理
1870	佐原小学校校舎設立の費用援助			
1890	道路の修繕費用援助 道路の修繕計画			
1910			商業の地域差	
1930				
1950				
1970				
1990				

5. おわりに

(1) 結論

本研究では，佐原の地域構造に関してその形成過程を踏まえて以下のことを明らかにした．

- 佐原の地域構造を「町内」という観点から捉えると，「住民自治」，「治水整備」，「社会基盤整備」，「産業」，「祭礼・信仰」によって構成されていることを示した．
- 佐原の地域構造は，「町内」という要素が核となり，社会基盤整備や祭礼・信仰の形成に対して機能することによって成立してきたが，社会基盤整備に対する機能が縮小したことにより時代とともに変化したことを指摘した．

(2) 今後の課題

本研究では，佐原地域を対象として地域構造を把握する一手法としての提案を行ったに過ぎない．そのため，この手法を用いて他地域でも同様の調査及び分析を行い，他地域での知見を増やす必要がある．また，今回は行うことのできなかった地域住民の方々へのヒアリング調査を行い，文書に記録されていない「町内」の機能をより詳細に把握することで，地域構造を再検討する．

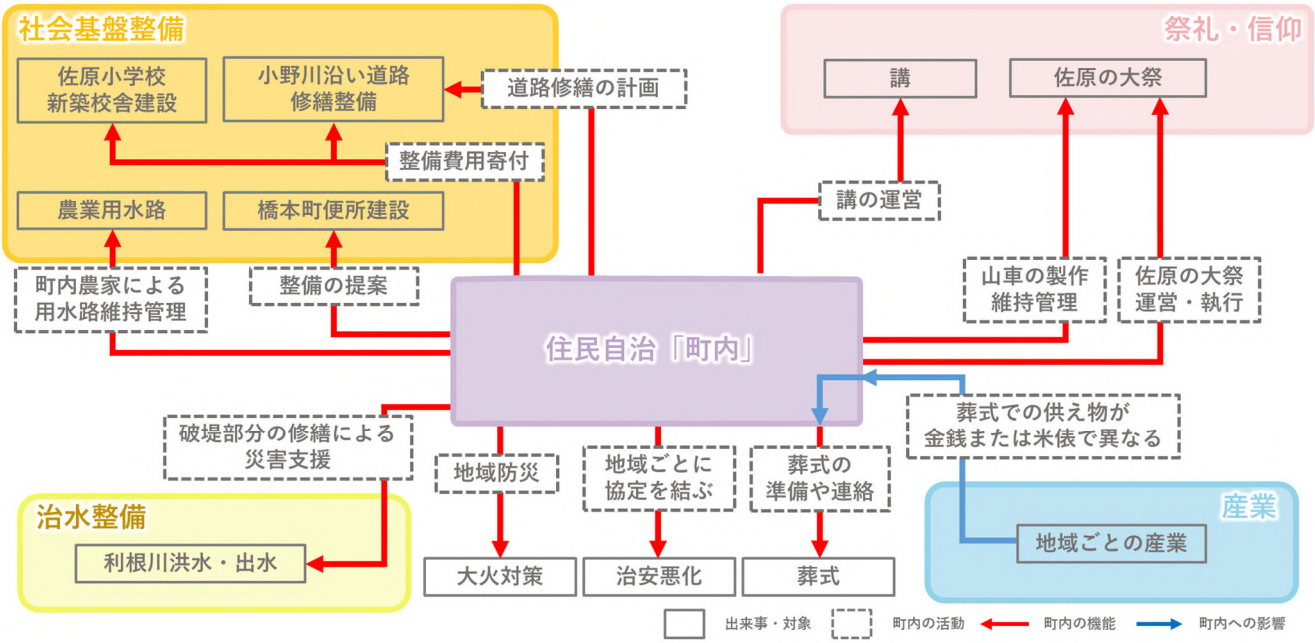


図 4 佐原における「町内」の地域構造への寄与

参考文献

1) 香取市：香取市都市計画マスタープラン，p.6，https://www.city.katori.lg.jp/government/plan_policy/plan/toshikeikaku/master-plan/index.files/010-masupura.pdf,【最終閲覧日：2023/01/25】
2) 北村貞太郎：地域構造と地域計画手法の構成, 地域学研究, Vol.21，No.1，pp.305-322，1990.
3) 太田実，山田昭夫，米森文嗣，真嶋二郎，川本裕夫：都市的活動に関わる街区諸量の分布相関よりみた都市中心部の地域構造について（地方中核都市，札幌の場合），都市計画論文集，Vol.1，pp.7-13，1966.
4) 入沢恒, 棚橋一郎：大都市周辺における地域構造の予測（三多摩地域の人口分布と土地利用）, 都市計画論文集, Vol.2, pp.1-10，1967.
5) 森田哲夫，細川良美，塚田伸也，湯沢昭，森本章倫：津波被害を考慮した地域構造に関する研究，社会技術研究論文集，Vol.11，pp.1-11，2014.
6) 齊藤充弘：原発事故発生前からの地域構造の変化をふまえた復興計画の課題に関する研究－福島県浜通り地域を対象としてー, 都市計画論文集, Vol.54, No.3, pp.1395-1402, 2019.
7) 樋渡彩：ヴェネツィアのリドにおける 19 世紀半ば以前の地域構造に関する考察, 日本建築学会計画系論文集, Vol.82, No.734，pp.1091-1098，2017.
8) 齋藤浩志郎：江戸・明治期の越後平野西部テリトーリオに関する研究, 景観・デザイン研究講演集, No.17, pp.204-211, 2021.
9) 佐原市役所：佐原市史，佐原市役所，pp.129-131，1996.
10) 千葉県佐原市教育委員会：佐原山車調査報告書，千葉県佐原市教育委員会，p.6，2001.
11) 前掲 9)，p.459，1966.
12) 前掲 9)，p.131，1966.
13) 前掲 9)，pp.467-469，1966.
14) 前掲 9)，p.487，1966.
15) 香取市：香取市ホームページ 香取市の概要・なりたち，https://www.city.katori.lg.jp/government/profile/profile.html,【最終閲覧日：2022 年 12 月 30 日】
16) 佐原市史編さん委員会：佐原の歴史 第 4 号，千葉県佐原市教育委員会，pp.49-50，2004.
17) 前掲 10)，p.17，2001.
18) 八日市場町：近世佐原の八日市場町と本宿祭礼の記録，八日市場町，pp.6-7，2018.
19) 前掲 9)，pp.641-642，1966.
20) 前掲 9)，pp.820-821，1966.
21) 前掲 9)，pp.816-823，1966.
22) 前掲 10)，p.15，2001.
23) 前掲 9)，p.633，1966.
24) 前掲 9)，p.634，1966.
25) 佐原市教育委員会：佐原の歴史　第 5 号，千葉県佐原市教育委員会，pp.4-9，2005.
26) 前掲 9)，p.170，1966.
27) 前掲 9)，p.170，1966.
28) 前掲 9)，pp.447-448，1966.
29) 千葉県史料研究財団：千葉県の歴史近世 2，千葉県，p.87，2008.
30) 前掲 10)，pp.12-15，2001.
31) 前掲 9)，p.425，1966.
32) 前掲 9)，pp.444-445，1966.
33) 前掲 9)，pp.426-427，1966.
34) 千葉県史料研究財団：千葉県の歴史 通史編 近現代 1，千葉県，pp.731-732，2002.
35) 前掲 9)，p.656，1966.
36) 前掲 9)，p.657，1966.
37) 石橋静夫：江戸時代 佐原村の豪商と財力, 佐原幽遊学書房, p.1，1998.
38) 前掲 37)，p.3，1998.
39) 篠塚猶水：佐原案内，中村写真館，1914.
40) 前掲 34）pp.732-733，2002.
41) 前掲 10)，pp.11-12，2001.
42) 前掲 29)，pp.33-34，2008.
43) 前掲 29)，pp.33-34，2008.
44) 清宮良造：増補改訂 佐原の山車まつり，清宮良造，p.9，1995.
45) 前掲 44)，p.12，1995.
46) 前掲 9)，p.419，1966.
47) 千葉県立房総のむら：町並みに関する調査報告書 佐原市本宿の歴史と民俗，千葉県立房総のむら，p.70，1992.
48) 前掲 47)，p.71，1992.
49) 前掲 47)，p.71，1992.
50) 香取歴史教育者協議会：香取民衆史 6，香取歴史教育者協議会，p.75，1993.
51) 前掲 25）に掲載『佐原小学校沿革史』より引用, p.10, 2005.
52) 前掲 25）p.11，2005.
53) 前掲 9)，p.806，1966.
54) 前掲 9)，pp.805-806，1966.
55) 前掲 9)，p.806，1966.
56) 前掲 9)，pp.806-807，1966.
57) 前掲 16)，p.64，2004.
58) 前掲 47)，pp.71-73，1992.